

初任国語科教員の授業実践力向上プロセスのあり方 —和歌山県教育委員会「教員としての資質の向上に関する指標」を活用して—

研究代表者：和歌山大学教育学部 丸山範高

共同研究者：広川町立耐久中学校 岩瀬つづみ

1. 問題意識と成果の概要

本稿では、大学院修士課程修了直後に採用された初任教員が国語科授業実践に関わる知見をどう高めているのかについて、和歌山県教育委員会「教員としての資質の向上に関する指標」を手がかりとしつつ報告する。本年度は、中学校校内授業研究会（授業公開と研究協議会）の記録を収集するとともに、研究代表者と共同研究者との対面インタビューを実施した。共同研究者：岩瀬は中学校2年の国語科授業を公開し、授業後の研究協議会で同僚教師たちから授業づくりに関わる多様な助言を受けた。対面インタビューでは校内授業研究会でのエピソードを参照しながら研究代表者が共同研究者から国語科授業実践の様子を聞き取った。

初任教員は教職経験年数が少ないため、子どもの反応や学習定着状況に応じて対応することにはぎこちなさが見られる。熟練教師のように柔軟な対応ができるまでには至っていない。また、授業力向上のために行う実践の省察についても、正解を1つに収束させない授業を多く行っているため、方向性が見出せず、やりづらさを感じ、次時以降の改善策が見出せなかったり、授業力向上の手応えを得られなかったりしているのが現実である。

しかしながら、明確なねらいに沿った学習指導計画を立案し、授業展開過程で思考力を要する課題を配置し、授業のまとめの段階で学習のふり返りをさせる、という授業実践の基本型を意識した授業構想力については獲得し、実践につながれていると言える。

また、学校現場での授業実践と大学での研究活動との関係についても検討した。共同研究者の岩瀬は、大学学部・大学院で、学習者の文学的文章の読みの拡充に関わる研究に取り組んできた。教材文を多面的に深く読むための分析技法のあり方、そして、分析した結果をどのような作品世界として表象するかという解釈のあり方について、研究を深めている。そうした研究の成果は、中学校国語科授業実践に直接活かしている側面と、子どもたちの実態に即して調整が必要な側面とがある。大学での研究活動を直接活かしているのは、教材研究のあり方である。教材文を多面的に読み込むために、どのようなことばに着目すればよいのか、着目したことば相互をどのように関係づけたらよいのかといった教材文を読み深める分析技法は、大学での研究活動がそのまま学校現場での授業準備に役立っている。一方、教材文のことばを手がかりに、どのような作品世界を表象させるかという作品解釈については、理論どおりの授業が難しい状況にある。教室の子どもたちの言語生活歴が多様であり、一部の子どもについては、語彙力が十分でなかったり、異質な他者の立場を推量することが難しかったりするため、作品世界に描かれた登場人物の実像を表象することがままならないのである。作品世界の表象という解釈のあり方については、子どもたちの言語生活の実態を見取りながら、子どもたちのことばに寄り添いながら、より丁寧な学習指導が必要である。

2. 活動の概要

(1) 公開授業

- 実施日：令和 2 年 11 月 10 日
- 学年・生徒数：中学校 2 年・25 名
- 教材：古典「扇の的」『平家物語』
- 単元の目標

登場人物の心情を想像しながら読み、『平家物語』に描かれた古典作品ならではのものの見方や考え方に触れる。

○本時の目標

那須与一が男を射殺した場面を読み、与一や義経、平家の兵、源氏の兵などがどんな気持ちでいたのかを考え、登場人物のものの見方や考え方を想像する。

○公開授業の概要

- ・めあての提示 (=本時の目標)
- ・ワークシートに示された課題について、個別学習・グループでの意見交流・教室全体での共有という順序で学習指導を展開した。ワークシートの課題は、立場の異なる登場人物それぞれの心情について、根拠を示しながら想像・記述するというものである。
- ・作品世界に描かれた価値観について、共感できるか否かについて、生徒一人ひとりが意見をまとめる。その上で、現代に生きる我々に近い価値観と、それとは異質な古典世界ならではの価値観が混在していることを理解することをもって本時のまとめとした。

(2) 校内授業研究会

当日協議された主な内容は次の通りである。

- ・生徒に考えを持たせる際に、単なる思いつきを発言させるのではなく、根拠・理由とセットで発言するよう繰り返し促しており、論理的思考が鍛えられる授業であった。
- ・板書、ワークシートとも、視覚に訴える、構造化されたものに整理できていた。
- ・学習活動の一部について、内容を盛り込みすぎている。十分な時間を取ってゆとりある授業計画が必要である。
- ・発問の内容が抽象的で生徒にとってわかりにくいものがあつた。より具体的なわかりやすい言い回しを工夫した方がよい。
- ・主体的で対話的な学習を意図していることは理解できるが、前時の学習内容を十分理解できていない生徒もいて、学習活動が形骸化している場面が見受けられた。

3. まとめ：初任教員の成長のあり方

和歌山県教育委員会「教員としての資質の向上に関する指標」（平成 29 年度版）によれば、初任教員はキャリアの第 1 段階：基礎形成期に位置づけられ、授業実践に関わる力量は「授業構想能力」「指導技能」「省察」の 3 観点について、それぞれ到達の期待される指標が道しるべとして示されている。以下、この指標について、研究代表者が共同研究者に対して行ったインタビュー結果を提示しながら、初任教員の成長のあり方について考察する。

「授業構想能力」については、めあてを明確にするなど、授業づくりの基本型を意識した授業準備が習慣化できるようになっている。しかしながら、多忙な中、先輩教員の助言

を受けつつ授業を計画できる機会がそれほど多いわけではない。そのため、初任者研修で同期採用教員と教科を超えて交流する場も授業づくりの知恵を得る重要な機会となっている。

「指導技能」については、生徒が質問しやすい雰囲気作りに努めるなど、子どもの反応・理解度を抛りどころとしながら、実践・評価活動を行うことはできている。しかしながら、言語生活に関わって生徒が抱える多様な背景についての理解が追いついておらず、特に、支援を要する生徒との関わりにおいて指導の手応えを得ることが難しい状況にある。

「省察」については、指標の記述がやや曖昧なこともあり、何をどうふり返ればよいか、試行錯誤の状況にある。国語科はねらいとなる学習到達点が一方向に収束しない授業が多く、克服すべき課題を自分一人では見出しきれないことも多い。ただし、校内授業研究会で授業を公開する機会を与えられ、同僚教師たちから教科を超えて多様な観点から助言を得ることで、生徒の学びに寄り添う授業実践において自分に何が欠けているかを気づく重要な学習機会となっている。